

“MY TOWN” うおっちんで

歩 & 目 定ラテス

Vol.70

遊子川地区の鏝絵文化に学ぶ
西予市城川町

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー



西予市城川町にある遊子川地区は、高知県境に接する標高200mから600m内外にある山間地集落で、肱川の支流野井川沿いに展開する。下流域の遊子谷と上流域の野井川が合体した地区名称であり、昭和の合併時(注1)に城川町となった旧遊子川村でもある。その村の西南端が外界と接していて、丁度野井川が



「持ち送りの波うさぎ」

黒瀬川と合流する地点が辰口。そこには旨い酒を醸すことで定評のある中城本家酒造がある。

一方、村の最奥部である東北詰めには竜泉という集落があり、予土国境の分水嶺になる雨包山(標高1111m)の麓にあたる。地図を眺めれば、遊子川地区は雨包山を水源とする野井川という竜が、あたかも辰口に向けて気を吐いているような格好の谷合い地形なのだ。

少し長くこの地域の立地イメージを述べてみたが、では「鏝絵」という本題に入ろう。遊子川小学校を過ぎた辺りにある石船家の土蔵、鏝絵装飾の面白味において県内でも屈指の蔵の一つ。まず正面の妻壁には中央トップに鶴を置き、その右下方に亀が対峙する配置となっている。惜しむらくは、亀の首が欠損しているが、塗り上げた当時は鶴亀の対話が伺えたとはいえない。梁隠しの位置には何の花をあしらったものか、亀甲の花紋様。その周囲

も波の花か、あるいは唐草紋の洋風アレンジ。他では見られない不思議な全体構成となっている。その妻壁の両肩に目をやれば、三段とした妻の縁取りに合わせてそれぞれに昇り龍がデザインされ、阿吽で睨み合っている。

また、蔵全体を引き締めているのは、腰回りのナマコ壁だが、正面側は三階菱となるよう塗り分けて、あえて左右のナマコとは違う印象になる工夫を加えた。入り口の庇に設けられた「持ち送り」も漆喰で廻し、左右に違

う絵柄「波うさぎ」と「唐草」という凝り様である。二階に開いた窓には綱文様の額縁があり、群青の青が風雪に耐えて残っている。施主の要請があったものか、

あるいはこの蔵を任された左官職人の入れ込みなのか、手間暇を惜し



「石船家土蔵」



「昇り龍」

水口家の鎧絵「壽」



まなかつたであろう半端ない仕事への向かい方が、つい観る側の想像を逞しくする。

永年月の時間経過で、漆喰壁の剥落も目立つが、不思議なのはナマコにしても鎧絵にしても、それを施してある箇所ほど丈夫な按配でよく残っている。残念ながら正確な建築年が不明だが、明治期の蔵として凡そ100年余り、余程しっかりした腕の左官職だったことがそれ分かる。

この蔵を支える自然石の石垣も、この辺りによく見られるチャートと青石、そうした野趣と洗練の鎧絵技術とのアンサンブルが素晴らしい。

次に、重谷地区にある水口家の土蔵。野井川沿いから左手斜面をしばらく登り、すると石垣の上に立派な蔵があり、唐破

水口家の鎧絵「雲龍」

風を備えた「雲龍」の鎧絵がこちらを眺めている。絵柄のタッチがどこことなく土佐風な感じがしないでもない。鎧絵文化は愛媛に限らず全国に存在するが、隣県高知にも多くの鎧絵があり、今も土佐漆喰は生産され城郭や寺社の文化財修復などにもよく使用されている。このエリアが、そうした土佐の文化と縁があっても可笑しくはない。

次いで、最奥の集落竜泉へ。その福山家の土蔵には、全県下的にここだけという珍しい「三番叟」の絵柄がある。こちらは鎧絵というよりも西洋のフレスコ画のような彩色絵柄である。土蔵二階に開けられた二ヶ所の窓、その土扉（引き戸）に何故か描かれた三番叟。左官職人が何を願い、何を想って入れたものか。能狂言などで登場するそれは、五穀豊穡を願い猿



福山家の鎧絵「三番叟」

楽師が演じる民俗芸能で、「田楽」などにも通じる農の文化なのだ。きつと村の穏やかな安寧を願うてのこと。猿に演じさせたのは、「魔が去る」にもかけたかと思われる。蔵の左手に寄りそう棗の古木とも相まって、村が平和で豊かに栄えていた頃を想像させる空間となっている。

この他にも、この地区には鶴亀の鎧絵や恵比寿大黒の絵柄がいくつかの蔵の妻壁を飾っていて、周囲を山に囲まれた隠れ里のような地に茶堂も点在するというような、桃源郷ぶりを見せている。冒頭で述べた、竜が伏せたような地形が醸す、何か不思議な神仏や靈力に包まれたような魅力的な小宇宙、そんな気がしている。最近、脚光を浴びている地域おこし「ゆすかわ食堂」の味な取り組みも、そんな地だからこそその芸当なのかも知れない。



福山家の鎧絵「三番叟」

(注1.) 昭和29年3月の合併で黒瀬川村に。同34年に町名変更があり、城川町となる。平成16年から西予市に。